

長谷川武次郎に協力した外国人たち

ラフカディオ・ハーンと日本

学生人気 No.1
ラフカディオ・ハーン

三好恵理



私は6月初旬に、アルバイトとして図書館事務室の管理運営課に配属されました。現在は、今年の展示会のテーマである「ちりめん本」に関する業務を行っています。今年の展示会は、外国語大学らしく「ちりめん本の先駆者である長谷川武次郎に協力した外国人たち」というこれまでになかったテーマで楽しむことができます。代表的な外国人を取り挙げるならば、デビッド・タムソン、バジル・ホール・チェンバレン、ジェイムズ夫人、ジェイムズ・C・ヘボンなどがいます。今回は、ラフカディオ・ハーンという人物について記します。

皆さんはラフカディオ・ハーンという人物をご存じでしょうか。「小泉八雲」というと分かりやすいでしょう。

彼は1850年にギリシャでアイルランド人の父とギリシャ人の母の間に生まれました。19歳で渡米し、外国文学の翻訳、創作を発表して文才を認められると、ハーパー書店の寄稿者になります。ハーンは39歳で記者として来日し、まもなく島根県尋常中学校及び師範学校の英語教師となります。その後は熊本をはじめ神戸など、日本の各地の学校や新聞社で働き、1896（明治29）年には東京帝国大学の教員になっています。

また、日本の伝統的精神や文化に興味をもったハーンは多くの作品を著し、日本を広く世界に紹介しました。来日以降に彼が書いた日本関係書物は『日本瞥見記』や『東の国から』などの有名なものだけでも10冊以上にも及んでいます。彼が遺した数々の文献は日本人にとっても母国の文化を顧みる際の重要な資料になっています。それほどハーンは文学の才能に恵まれた人物でもあったのです。

私は今回「ちりめん本」について知識を深めていく過程で、ハーンが「ちりめん本」の著者でもあったことを知りました。彼はちりめん本の出版者である長谷川武次郎に協力して『猫を描いた少年』『ちんちん小袴』を含めた5作品を書きましたが、「ちりめん本」の紹介本でのハーンに対する扱いはこの5冊の作品を同じ帙（ちつ）に入れて刊行するなど何か特別なものがあると私は感じました。それは、ハーンが日本をこよなく愛し、その結果として日本研究の分野で既に多くの業績を挙げていたからに他なりません。

彼が1年3ヶ月の日々を過ごした松江には「小泉八雲記念館」というものがあります。ここでは日本の美しさを発信したラフカディオ・ハーンの世界を堪能できるそうです。

私はハーンの世界を全て読んだことはありませんが、特に『怪談』という作品に興味があります。ハーンの妻セツによると生前、彼にとって「怪談」に関する書物は宝物だったそうですが、私自身も「怪談話」が好きなのが興味を持ったきっかけです。ハーンが愛してやまない故郷松江が舞台で、『怪談』ですが根本的な人間の心に迫った作品として評価が高い作品です。

彼が日本をどのように感じとったのか、「ちりめん本」を含めた作品を読んだり、ゆかりの地に足を運んでみると、きっと分かるのだらうと思います。皆さんも機会があれば是非、ラフカディオ・ハーンの世界に浸ってみてはいかがでしょうか。

みよし えり（英米語学科4年次生）